

光 学 天 文 連 絡 会

Group of Optical and Infrared Astronomers (GOPIRA)

会 報

No. 62

平成3年11月15日

光学天文連絡会事務局
(東京大学理学部天文学教育研究センター)

目 次

I.	第63回光天連運営委員会報告	2
II.	第64回光天連運営委員会報告	4
III.	第14回国立天文台運営協議員報告	5
IV.	第15回国立天文台運営協議員報告	6
V.	第10回国立天文台総合計画委員会報告	7
VI.	第2回国立天文台大型光学赤外線望遠鏡専門委員会報告	8
VII.	第7回国立天文台光学赤外・太陽専門委員会報告	10
VIII.	第10回国立天文台理論・共通専門委員会報告	11
IX.	第二回光赤外ユーザーズミーティング報告	13
X.	観測装置ワークショップ世話人会報告	15
XII.	天文情報処理研究会（IRAF担当者会）第6回会合報告	17
XIII.	天文情報処理研究会（IRAF担当者会）第7回会合報告	18
XI.	観測装置小ワークショップIII・「高解像観測・小望遠鏡による観測」報告	19
XIV.	プログラム小委員会答申 エンジニアリングタイムの導入について	20
XV.	会員異動	25

掲示板

会費納入のお知らせ	1
天文情報処理研究会第8回会合のお知らせ	21
平成3年度国立天文台ワークショップ 『データ解析/データベース ソフトウェア開発シンポジウム』のお知らせ	21
平成3年度国立天文台ワークショップ『HSTによる天文学』のお知らせ	21
「すばる」観測装置ワークショップ 1st circular	22
「赤外線検出器ワークショップ（第3回）」のお知らせ	23
「すばる通信」の発行について	24

会費納入のお願い

平成3年度分会費（一般二千円、学生千円）をまだ納めていない方は
同封の振替用紙にて納入下さるようお願い致します。

光学天文連絡会 事務局 会計

I. 第63回光天連運営委員会報告

日時 平成3年8月21日(水) 18時-20時30分

場所 国立天文台会議室

出席者 舞原、市川、海部、家、上野、大谷、岡村、谷口、小平、磯部(以上委員)、
唐牛(出席を依頼)、田辺(事務局)

議事

1. JNL T (SUBARU) 運用体制とOSDA

今年になってから、光天連(運営委や5月学会時の総会)や国立天文台で行なわれたワークショップおよびJNL T委員会などで、OSDA案とJNL Tの運営組織との関係について、具体的な組織図の案に踏み込みながら議論が進められてきた。今度のMKOユーザーズミーティング(9月下旬)の頃には、OSDAの文書を国立天文台とハワイ大の間で合意する必要もあり、唐牛氏に出席を依頼して光天連としての意見交換を行なった。

基本的には、今のJNL T委(JNL T Board)に15%相当のハワイ大メンバーが入るといふのでよい。ハワイ大は装置開発計画の立案に関するテクニカル委員会にも参加できるとする(人事・予算などに関連する事項には関与しなくてよいだろう)。JNL T側の観測割当を行なう委員会(TAC)にも参加できることになっているが、逆に、ハワイ大のTACに日本側から参加するのも意味があるのではないか、等の議論があった。

2. 観測装置ワークショップの方針

来年早々に予定している観測装置の大ワークショップの内容について、意見交換を行なった。今回もサイエンティフィックな内容よりも、インストールメンテーションの開発に重点を置くほうがよいという意見が多かった。

サイエンティフィックな内容を取り入れるとすると、JNL Tによる「キーププロジェクト」を目指したやや包括的な観測を考慮に入れながらレビューをしてもらうという意見があった。

しかし、観測装置開発の態勢の遅れは非常に深刻であり、そのポテンシャルを高めるための努力により力を注ぐべきであるとの観点から、個々の装置開発の内容の検討と、それをどのようにして実現するかを主に議論できるようなワークショップをもつことに傾いていた。

ワークショップの具体的な企画は、昨年度からの世話人会に依頼する。

3. データ解析環境

データ解析のハードとソフト両面を、SUBARU建設と平行して計画的に構築・整備していくことも、光天連として関心の高い重要な課題であるので、データ解析ワーキンググループ(世話人:市川T)をおいて検討を行なっている。

IRAF担当者会を発展的に解消して、光赤外以外も含んだ「天文情報処理研究会」を発足させて定期的な会合をもつ予定になっている。問題点としては、将来を見通したハード・ソフトの長期計画に関して、ヴィジョンとその内容および要求の仕方など、具体案を議論する場にはなかなかないということ。運営委としても、継続して議題とすることになった。

4. 国内観測所の運用

岡山観測所の運用については昨年、エンジニアリングタイムの導入、観測装置の開発に伴う観測時間の確保、さらに観測所プロジェクトの導入などの議論が進んできている。最初のエンジニアリングタイムの件はすでに合意ができているが、2番目、3番目の問題も光天連としては認めていく方向で、ユーザーズミーティングなどで議論を進めることになった。その際、観測所自身がホストとしてももう少し積極的に具体案を出してやっていっても良いのではないかという意見が述べられた。

5. 諸報告・その他

1) SUBARU望遠鏡の仕様

海部委員より、望遠鏡やドーム、観測所建物などの仕様や内容については、国立天文台内の望遠鏡準備室を中心として検討が具体的かつ詳細に進んできているが、光天連の会員に広く情報を流して意見を聞いてフィードバックをかけることは充分できていないので、光天連シンポジウムまたは観測装置ワークショップなどの機会に「望遠鏡の仕様等」をテーマにしたセッションを設けたいとの提案があった。

2) ハワイ大2.2m望遠鏡の成果報告書

舞原委員より、ハワイ大2.2m望遠鏡による観測成果報告書を作成したことが報告された。国立天文台から概算要求されている国際協力関連経費のひとつとして、UH 2.2m 使用分担金が使えるように、JNL T委などを通してはたらきかけている。

3) DSS (=Digital Sky Survey) プロジェクト

岡村委員より、アメリカで計画されているDSSプロジェクトに日本の参加が期待されているが、日本側の組織作りも進められつつあることが報告された。

4) SUBARUの運用方針

岡村委員より、8mクラスの望遠鏡は、SUBARUができる頃は幾つかがほぼ同時に稼働するので、SUBARUで画期的な成果をあげるためには、出来上がって数年は特に重要な「キーププロジェクト」を走らせるという運用方法を考えるべきである、との提案がされた。今後、そのようなキーププロジェクトを中心に据えた観測プログラムの考え方について議論する場を、そろそろ作る必要があるとの認識についてはセコンドがあった。

II. 第64回光天連運営委員会報告

日時 平成3年10月15日(水) 18時-20時

場所 天文学会秋季年会会場(水戸市民会館206号室)

主席者 舞原、磯部、市川、上野、岡村、小平、谷口(以上委員)、田辺(事務局)
(欠席:大谷、海部、家)

1. 岡山観測所の運用

大谷委員がまとめた今年度の光赤外ユーザーズミーティング報告(本会報掲載)をベースにして意見交換した。まとめ方の文について、次のような若干の注意があった。

(a) 写真の廃止の提案が観測所側からあり、P.I.的な使い方以外、基本的には廃止を決めた。

(b) オプザーバトリイ型観測装置の開発にともなう、望遠鏡時間をかなり多く使う大プロジェクト的な申し出が予想される。それに対しては、基本的にはレフェリーによる評価をベースにし、プログラム委員会のTACの役割を活用して、運用で大プロジェクトにも対応すればよいという考え方が示され、その方向で検討する。

(c) ユーザーズミーティングでの議論の結果を、光赤外専門委員会などに討論内容をまとめた形で報告するのがよい。

2. 観測装置ワークショップ

平成3年10月3日の観測装置の大ワークショップ世話人会の報告(本会報掲載)を舞原が行ない、今年度の会のもち方、内容について意見交換した。

今年のワークショップの基本線は、インストゥルメンテーションを重視し、開発態勢をいかに強化するかをテーマとしてやることに異存はないが、ガイディングプリンシプルとしての天文学的な目標との結びつきを良く考えたバランスのとれた進め方が必要である。

関連した会として、「赤外線検出器WS」が来年始めに予定されている。

3. その他

1) ハワイ報告(小平): MOUの締結は1年延長された。OSDAのサインも少し延びて、来年4月の予定。内容はこれまで議論のあった委員会組織についてもこちらの案でまとまりつつある。また来年7月にすばるの起工式を行なう。

2) データ解析関係(市川): 12月2、3日: 天文情報処理研究会、3、4日: データ解析/開発シンポジウム、5日: HSTデータ解析WS、の一連の会合が予定されている。最近特にマンマシンインターフェースに注目しており、10月18日に第2回ワーキンググループ会合をもつ。

3) 銀河形成重点領域報告(岡村): 藤本氏が代表者となって準備されている重点領域では、SUBARUに関連した光赤外のプロジェクトを軸にしようとしていたが、モザイクCCDははいるとして、赤外のチームをどう組織するかについて意見交換した。

4) 光天連懇談会: 学会中の懇談会における報告の内容と時間をきめた。

III. 第14回国立天文台運営協議員会報告

日時 平成3年6月3日(月) 13時-17時

場所 国立天文台講義室

1. 教官人事

柴田一成(太陽助教授)

吉田春夫(力学助教授)

菊地 仙(堂平助教授)

他、技術系2名の昇任を可決。光赤系の教授と助教授各1名、宇宙電波及び太陽電波の教授各1名の公募を承認。今後の人事の進め方を討議した。

2. 次期台長候補者選出の方法

古在台長の来年3月末の任期満了に対応して次回には具体的検討に入る。手順案原案を会長が作るようになった。

3. 平成4年度概算要求

(1) 研究部門の増設

研究主幹を配置したJNL T計画推進本部及び同本部に望遠鏡システム部門、観測装置システム部門、天文機器技術部門(客員)と併せて、天文シミュレーション部門(理論)及びサブミリ波天文部門(電波)の設置を要求。また客員部門については既設部門の助教授を要求。

(2) 付属施設の新設・整備

JNL T計画推進にあたっては、実験、開発体制の整備を計ることが不可欠であり、研究開発及び共同利用サービスの充実を図るために必要な実験開発センターの新設を要求。また共同利用事業遂行のため付属施設に教育職の増員を要求。

(3) 特別経費(実験経費)

研究交流委員会及び総合計画委員会の各3名の委員からなるワーキンググループを設け検討したものであり、要求順位については、多少の変更がある。

(4) 大型特別機械整備費

新たにハワイ現地における山頂敷地の造成をスタートさせるなど、平成3年度から建設に着手した大型光学赤外線望遠鏡の計画的推進を図る。

(5) 特別設備費

太陽望遠鏡、集合アンテナ型VLBI実験装置、ミリ波干渉計高精度アンテナの整備及びスーパーコンピューター(三鷹)を要求。

(6) 事務機構の整備、(7) 技術部の充実

研究交流主幹及び管理部、技術部の定員増を要求。

(8) その他

海外の大型観測装置を利用するための外国旅費及び事業費を要求。また、国際地球回転事業について10mアンテナ完成による事業量増大に伴う経費を要求。

4. 平成3年度共同研究等の採択
採択結果は天文台ニュース参照。

5. 総合計画委員会委員(欠員分)の選出
高原氏の辞退に伴い常深氏(阪大)が委員となった。

6. 総合研究大学院
学生定員6名、教官約40名で平成4年度より出発するよう要求準備中。

(文責 小平)

IV. 第15回国立天文台運営協議員会報告

日時 平成3年9月14日(土)
場所 東京大学山上会館

1. 教官人事

安藤裕康(光赤教授)
稲谷順司(宇宙電波教授)
小杉健郎(太陽電波教授)
小林行泰(光赤助教授)
他、技術系1名の昇任を可決。外国人客員教授2名を承認。国立天文台での開発研究にかかわる教官の評価について長時間にわたる活発な意見交換があった。

2. 次期台長候補の推薦

台長候補を考える際の背景などについての一般論が交わされた後に、複数の具体的な候補者の名にも言及された。年齢的にも巾が広く、また教授、助教授にわたり、天文台の内外にまたがった。次回(11月2日)までに2名(以内)連記の無記名投票を行ない、その上位者についての資料を整え、次回は意見交換ののち単記投票を行なって、(原則として)上位複数名を評議会に推薦することとした。

なお10月14日の天文台教授会でも意見交換がある予定で、その結果が各運営協議員に教授会議長より知られるというので、一次投票のメ切りはその後(10月23日)とすることになった。

(文責 小平)

V. 第10回国立天文台総合計画委員会

日時 平成3年9月13日(金) 11時-16時

場所 国立天文台会議室

出席者 平山(委員長)、戎崎、谷口、福井、芝井、常深、小杉(以上台外委員)、池内、吉澤、観山、稲谷、笹尾、唐牛、花田、平山(以上台外委員)、海部研究交流委員長、牧野、西村、近田、小笠原、森田、市川、真鍋、田村、古在、荒井管理部長

議事に入る前に、国立天文台の計算機施設の現況報告があった。

(水沢: 報告者真鍋)

汎用大型機日立 H680-H+ 主記憶 256MB+ ディスク 30GB、ワークステーション 50 台、専属職員 1 名等。

(三鷹: 報告者西村)

汎用大型機富士通 M780-10S、ワークステーション 5 台、専属職員 4 名等。

(野辺山: 報告者近田)

太陽電波にはヘリオグラフ観測用として機器を導入予定。宇宙電波には、汎用大型機富士通 M760 が 3 台およびスーパーコンピュータ富士通 VP200E(0.85GFLOPS)+ ディスク 50GB がある等。

(岡山: 報告者西村)

従来のスーパーミニコンの使用から現在では主力がワークステーションへ移行。

議事 国立天文台における計算機設備の展望

(話題提供者: 戎崎委員)

1. 東京大学駒場における重力多体問題専用機 GRAPE 計画の推進状況の紹介、さらに、流体計算専用機の開発計画である DREAM-P 計画の報告があった。現代は専用計算機の時代であることが強調された。

2. 国立天文台計算機施設の将来像の提案として

- (A) メインフレームからワークステーション群への移行則ちダウンサイジングの必要性、
- (B) 専用計算機開発および経常的運営費の確保の必要性、
- (C) 局所的及び広域的計算機ネットワークの構築の必要性、
- (D) 計算機関連予算の配分の見直しの必要性、

が報告された。以上の将来像に関する提案を受けて、委員及びオブザーバの間で活発な意見交換がなされた。

今回の意見を踏まえて総合計画委員会の下にワーキンググループを作り、各計算機施設の将来像の具体案を作成する事が了承された。

次回総合計画委員会の議題「各研究分野の将来像」と題して、ここ5年程度の間にどのようなビジョンで研究を発展させていくかの構想を出して検討することとした。種々の研究分野からスピーカーを出して報告をお願いすることとした。

次回は平成4年1月28日に開催。

(国立天文台ニュースより)

VI. 第2回国立天文台

大型光学赤外線望遠鏡専門委員会報告

日時 平成3年7月3日(水) 11時-16時20分
場所 国立天文台講義室
出席者 安藤、池内、石黒、市川(隆)、大谷、岡村、海部、唐牛、小平、芝井、高原、舞原、古在、台長、平山企画調整主幹、荒井管理部長

報告

1. JNL Tに関連しての来年度の概算要求事項について(台長)

2. JNL Tに関連した人事(小平)

平成3年度の部門増として光赤外計測(教授1、助教授1、助手2(振替))が認められた。教授はJNL T計画を推進する人、助教授は技術開発に中心的役割を果たす人を公募している。秋の運営協議会には候補者を推薦したい。

委員から技術開発を中心とするならば、工学系、民間人、外国人などの採用があってもよいのではないかと意見が出た。

3. JNL T計画の進行状況について

◎ 6月13日にハワイでJNL T計画の公聴会があり、通過した。

◎ 望遠鏡本体その1-1についての契約について5月1日官報公示、6月14日に入札が締切られ、7月12日開札の予定で進んでいる。

6月27日に技術提案書についての技術審査会が開かれ、個々の精度や総合性能をどのように検定するのかなど、システム全体についての記述が弱いなどの意見があったが、合格とされた。

◎ 山頂工事について進入路、敷地造成、地盤改良、ドームと制御棟の配置計画の説明があった。

◎ 平成4年度概算要求について、主な変更点、推進経費などが説明された。委員からプロトタイプ等開発実験経費、工事期間中の外国旅費の確保などが要望された。

◎ 赤外シミュレータは口径を2m程度とし、天文学のできるものにする計画である。光シミュレータについては計画はまだ充分練られていない。

◎ 三鷹の技術体制の見直し

光学、エレクトロニクス、機会工作を併せた開発実験センターを3年計画、10人規模の体制で整備する方向で進んでいる。

◎ ドーム設計の進展状況

フラッシングタイプのドームの構造と機能について、主鏡交換の方法、観測装置とドーム構造の整合性、排気、冷媒の供給などに関連した検討課題がある。ドーム内の空気の流れの計算機シミュレーションを計算流体力学研に依頼。ドーム全体の概念を把握するために、コンピュータグラフィックスによるビデオ3次元アニメを制作する。

◎ 岡山観測所のドームシーリングの測定実験、ゾーンプレートをを用いた鏡面測定の62cm実験望遠鏡での実験についての報告があった。

4. パンフレットの制作について

JNL T計画を広く世界に宣伝するパンフレットを作る案が紹介された。

5. 舞原委員より、観測装置ワークショップに関しての報告があった。

6. 池内委員よりJNL Tの観測対象候補を提供するであろう米国での「Digital Sky Survey of the Northern Galactic Cap」の紹介があった。

7. OSDAについて

ハワイ大学との運用・用地開発協定に盛り込む委員会組織、ハワイ大学が参加するJNL T Boardについて提案された。議論の結果、JNL T Boardは光赤外分野の専門委員会とは別の専門委員会として位置づけることになった。JNL Tの建設・人員配置・運用体制について。建設中は望遠鏡建設部と天文機器開発研究部、光学赤外線天文学研究系が進める。完成後は現地勤務のハワイ観測所長が統括する案が示され、種々の議論があった。

8. JNL Tの愛称公募について

JNL Tにかかわって親しみのある名称を募集することになった。選考委員として本専門委員会からは市川、芝井両委員が選ばれた。他の委員については天文台に選考を一任した。

9. 舞原委員よりハワイ大学2.2m望遠鏡を用いた観測項目、研究成果についての出版原稿の回覧があった。

(文責 市川 隆)

VII. 第7回国立天文台光学赤外・太陽専門委員会報告

日時 平成3年7月2日(火) 13時30分-17時20分

場所 国立天文台会議室

出席者 小平(委員長)、尾崎、斎藤、辻、椿、吉村、若松(以上台外委員)、
桜井、平山、山下(以上台内委員)、(欠席:黒川副委員長、竹内委員)、
家(装置開発小委)、菊地(堂平)、前原(岡山)

(議事)

1. 平成2年度活動報告・決算報告

2. 平成3年度活動計画・予算案

3. 小委員会報告

(1) 装置開発小委員会

(2) プログラム小委員会

4. その他の議題

(1) 太陽小委員会の設立又は専門委の分離

(2) 光学赤外 / J N L T 関連の組織

(3) 総合研究大学院大学

(4) 光赤外ユーザーズミーティング

(5) 観測施設の利用資格

(主な審議内容)

○各研究系・観測所の平成2年度活動報告と平成3年度活動計画について説明を受け、質疑応答の後、承認した。

○岡山・堂平の運用、プログラム編成は、岡山74インチについての課題採択をレフェリー制により行うなど、従来通りの方針で進める。

○装置開発小委の関連では、重要な装置開発計画についての提案は、充分時間的余裕をもって本委員会に提出してもらうよう要請する。

○本委員会について太陽関係は当面は分離せず、オブザーバーを適宜増やすことで対応する。

○今期の光赤外ユーザーズミーティングは8月21-23日に三鷹で開催する。運営方法、意見の反映のさせ方については更に検討を要する。

次回は平成4年2月上旬に三鷹で開催予定。

(国立天文台ニュースより)

VIII. 第10回国立天文台理論・共通専門委員会報告

日時 平成3年10月11日(金) 13時-16時

場所 国立天文台会議室

出席者 池内、市川(隆)、岡本、定金、高原、近田、土佐、西村、長谷川、松田、吉沢

報告:

(1) 概算要求(すばる望遠鏡関係、総合研究大学院大学)

(2) 台長選挙

議題:

(1) 天文学データ解析計算センターの共同利用について

(2) スーパーコンピュータ導入の経緯について

(3) 国立天文台研究員制度について

(4) その他

報告:

(1) 概算要求

すばる望遠鏡の平成4年度概算要求について

部門の新設や建設費の圧縮を迫られているが、完成が遅れないように努力していく必要がある。

総合研究大学院大学新設

平成4年4月に開校。博士過程、1学年6名募集

「4月開校予定」として1月頃生徒募集を行なうことになる。

(2) 台長選挙

現在の台長の任期が平成4年3月末で終るので、後任の候補者選挙が近々行なわれる。

議題:

(1) 天文学データ解析計算センターの共同利用について

M780の運用

CPUの稼働率は相変わらず高く、ほぼ満杯の状況にある。10月から試験的にプログラム相団員制度を設けた。

画像処理設備

IRAF担当者は初期の目標をほぼ達成したので、活動の幅を広げるため、光、赤外線分野の他、X線、太陽、メーカーなども加わり、9月から天文情報処理研究会と改称した。

カタログデータ

現在保有カタログ数は600種を越えた。リストを見る方法はいくつかあるが、リスト、カタログ共同の合わせがあれば、発送する。主要なデータのオンライン化も検討している。

平成3年度予算

維持費の占める割合が大きく、施設の充実が難しくなっている。

水沢観測所

現在あまり混んでいなく、N1 ネットにも入ったので有効利用が望まれる。

平成3年度計算機共同利用旅費の割当

予算が少ないので、前期に割り当てられた人は不採択にするなどして、三鷹4件、野辺山7件が採択された（水沢は応募なし）。三鷹は画像処理、野辺山は理論計算が多い。計算機のネットワーク利用も可能になるように環境を整備しつつある。三鷹と水沢、野辺山は11月頃IP接続される予定である。野辺山は現在のエリダヌスをもっと積極的に利用してほしい。ただ、設備が充実しても通信費、保守費などの経費が必要になるので、負担は大きくなっていくことが危惧される。高エネ研では通信費が費目化されているので、天文台でも努力が必要である。

(2) スーパーコンピュータ導入の経緯

新規導入は現状では難しいので、富士通との共同研究をすることで、富士通から中古機を無償で借り入れるための手続きを進めている。しかし、電気工事、空調、内装などでかなりの費用がかかる予定である。現在まだその70%しかめどがたっていない。運転経費も電気代などで年間1000万ほどかかる。その半分を外部の大口利用者が負担することが可能か検討している。数100時間もの超大ジョブについては年間10件程度にしぼるため、レフェリー制を敷く。

(3) 国立天文台研究員制度について

野辺山（現在5名定員）以外に2-3名程度の研究員を募集する。月10万円程度の給料になる。しかし東京のような場所での生活には不十分なので、増額してほしいという意見も出された。

(4) その他

夜間運転での事故防止のため、職員が交代で異常を知らせるポケットベルをもっているが、いまだ事故もなく、心理的負担が大きいので、守衛などに業務を委託することを検討する。

計算機小委員会 いまだで外部委員だった柴田、小笠原委員が国立天文台の職員になったので、新たに外部委員として蜂巣、小島氏にお願いする。

次回本委員会は12月13日（金）に開催する。

（文責 市川 隆）

IX. 第二回光赤外ユーザズミーティング報告

光赤外ユーザズミーティングが、8月下旬に国立天文台で開催された。JNL T建設の開始にともなう、観測装置開発、赤外観測の体制作りが、国立天文台内外で活発になってきている状況を踏まえ、今年度の会合は、これらの課題と共同利用望遠鏡、とくに188 cm 望遠鏡の運用のあり方について、議論を深めることに重点が置かれた。

会合の概略は、次のようであった。

1. 開催要項等

主催 国立天文台、東京大学理学部天文学教育研究センター

後援 光学天文連絡会

会期 平成3年8月21日13時-23日16時

場所 国立天文台講義室

講演等 口頭報告35、ポスター報告18

参加者 97名（天文台外63名、天文台内34名）

2. 観測所等の報告

岡山、堂平、木曾の各観測所の事業報告と現状、計画の報告が例年どおりされた。データ処理解析センターの報告も初めて行われた。また、天文台三鷹地区と共同利用機関以外の主な光赤外研究機関（東北大天文、東大教室、東大センター、京大宇宙物理、京大物理第二）の装置・データ処理システム開発に関する近況報告もされた。岡山に技官1名の補充が10月になされる予定であること、東北大学と東大の天文教室に、光学観測のシニアスタッフがそれぞれ1名新たに着任したことが技術開発体制との関連する人の動きとして注目された。

装置関係では、岡山では、京大と共同開発されたSNGが次期から公開される。偏光撮像装置の開発は進行中であり、赤外分光測光装置の開発に取り組むことが報告された。堂平では、1望遠鏡1装置（91 cm + 偏光測光装置）のシステムが定着して、研究成果が上がり始めている。木曾観測所では、CCDカメラが近々完成の見込みとのことである。

天文学データ解析センターでは、データベースのリモートアクセスおよびCD-ROMでのデータ配布システムの計画がある。データ処理システムの開発はボランティアなグループとの協力を軸に続ける。

3. 共同利用関係委員会の報告

光赤外太陽専門委員会：光赤外関係の意見を反映し易くするために、光赤外関係者約4名が非公式委員として認められた。共同利用の利用資格（防衛庁、私企業関係者の利用）、岡山のエンジニアリングタイム、ユーザズミーティングの位置づけについてコミュニティでの議論を必要としている。

装置開発小委：188 cm 望遠鏡の1焦点1装置の基本方針、188 cm 鏡用赤外分光撮像装置、MES-SIAへのサポートをそれぞれエンドースする方向で審議している。

プログラム小委員会：現行の制度の評価と新方針の提案は来年度に行なう。観測所時間・エンジニアリングタイムその他のいくつか解決すべき問題がある。

このほか、木曾利用者委員会の報告がされた。

4. JNL T 関係の報告

JNL T 計画の進捗状況が報告された。全般的な説明に加えて、愛称「すばる」の決定とその経過、共同実験室の運用状況と実験開発センター計画などの国立天文台の技術開発体制強化の状況と展望が報告された。

5. 研究成果報告

最近の比較的主なものとして観測研究成果の中から各観測所で選んだもの4件が口頭で発表された。星振学(岡山:神戸氏)、活動銀河(岡山:綾仁氏)、Be星の偏光(堂平:平田氏)、大規模銀河サンプルの解析(木曾:嶋作、柏川氏)。

ポスターでは、サイエンス、インストゥルメンテーションに関する18の研究発表があった。

6. 188 cm の運用

このテーマで、7つの講演と、2時間余りの討論がなされた。

講演: 山下(泰)氏は、ピクセルに空間(波長)が量子化された場合に現れる見かけの情報を論じ、CCD時代における注意を喚起された。佐々木(敏)から1焦点1装置を今後の基本方針とし、さしあたり写真の廃止、多色測光装置のP.I.化の提案と、JNL T完成後の188 cmの有効な生かし方として恒星分光の示唆があった。金光氏が恒星分光の具体的な課題の展望を論じた。山下(卓)氏はニグモスカメラを用いた近赤外分光撮像装置の計画を紹介した。これに関して、岡山における水蒸気量の評価を巡って議論があった。また装置の運用にあたり望遠鏡利用の優先権が山下氏から提案された。吉田(重)、菅井両氏は、188 cm鏡による銀河系内外の天体観測課題の展望を紹介した。高遠氏は188 cmを観測装置開発のために使えば、この分野を専攻する人材養成に有効であると主張した。

討論: 主要事項は次のようにまとめられる。

- (1) SNGの公開に関連して、開発された観測装置の利用による成果の公表には、その装置の論文を引用するという従来からの原則を再確認した。
 - (2) 防衛大学校教員と民間企業職員の共同利用のあり方に関する、天文台の方針について、前者の当事者を含めて可否が議論された。これについて、今後も議論を重ねることを確認した。
 - (3) 写真の廃止の方針の提案が観測所からあり、基本的に了承された。P.I.的な利用は残される。
 - (4) 望遠鏡の保守時間としてのエンジニアリングタイムをプログラムで設定し、その運用は観測所に委ねる。
- 観測所観測装置の開発にともない今後、望遠鏡時間を多く使うプロジェクトの申し出が予想される。これについては、レフェリーによる評価をベースにして、プログラム委員会のTACの役割を活用して、運用で大プロジェクトにも対応するという基本的考え方で、検討することになった。
- (5) ユーザーズミーティングでの議論を、天文台は運営に反映させるべきという議論に関して、今回の討論内容を関係委員会に世話人がまとめを報告する。(注: 9月16日付で、討論の記録が、光赤外太陽専門委員会、プログラム小委員会、装置開発小委員会、および岡山観測所の各責任者宛に送られた。)

(ミーティング世話人代表 大谷記)

X. 観測装置ワークショップ世話人会報告

日時 平成3年10月3日(木)

場所 国立天文台

出席者 海部、舞原、岡村、大谷、市川、唐牛、安藤、佐藤、上野 (欠席: 家、佐々木)

昨年度には、「JNL T観測装置とその開発研究」の公募という形で提案を募集し、ワークショップ(1990.12)とそれに続く小ワークショップ(I、II、III)をもった。これらを契機に、装置開発を指向するグループの芽が幾つか育ちつつある。しかし、実際には開発的な仕事を進められる研究環境がなく、資金源もなんら保証はないところが大部分なので、これからの進め方がたいへん重要である。

1) 最初に現状をどう見るかについてのフリーディスカッションを行なった。

※特に大層な装置開発を考えなくても、SUBARUができる頃には、現在作りつつある装置がある訳だから、なにかは取り付けられて観測ができるだろう。

※8 m望遠鏡が複数あるときに、たとえば、CGS4をもっているのと一世代前の装置しかないのでは成果に大きな差ができる。

※これから装置開発を行おうとする大学では、基本設備に初期投資がいる。今はたいへん貧弱である。

※要は、自分の研究生命をかけて観測装置の開発を進めるのだという精神が必要。

※装置開発を基本とした研究には複数のスタッフがグループを構成してやる必要があるが、その点に関しては一般的に大学では認識が低い。

※資金源がない訳ではなく、科研費で開発研究を相当程度やれるはずだ。

※観測装置の開発でかなり成果のあがっているものとしては、モザイクCCD、PtSiカメラ、赤外線分光器などがある。

2) ソフトの問題

※モザイクCCDが使われるようになって、ソフト開発の問題がクローズアップしているが、ソフトの開発は評価されないで、若い人を巻き込んだ態勢が進めにくい。

※ソフトの開発で大きな仕事をした人は、必ず評価されるはず。(宇宙電波でもそういう問題はあったが、評価してきた。)

※本来はソフトの本格的な開発には、かなりの人数のプロ集団がいるが、日本では観測装置の開発でも外国のような支援エンジニアリングスタッフは得られないのと同様に、そのような態勢はとれない。完璧なソフトを求めるのではなく、手作りソフトで、自前のデータを解析して成果を出すことから始めるのがよい。

※データ処理の方法をソフトだけでなく、専用ハードで処理することも考えた開発が必要である。

3) アダプティブオプティックス

※8 mクラスの望遠鏡の標準装置として必ず必要。

※開発要素が多く非常にたいへんな仕事ではあるので、お金で解決できる部分はある程度買うこともやもうえない。

※いくつかの方法があるようだが、本当に何がものになるのか、まだ良く見えてこない。※

4) 多天体分光

*多天体用ファイバー分光器は、開発の方向性と進展の具合があまりわからない。

*DSSプロジェクトで予想される成果との関係はどうか。*深さの点でまったく違う。

*今後の具体的な開発態勢をどうしていくのか検討が必要である。

5) 分光器

*岡山 188cm のカセグレンにエシエル分光器をつける案があったが、あまり見通しはないので、クーデ分光器に赤外線 (NICMOS) カメラをおいて高分散の観測を行なうことが検討されている。

*岡山に FOS という案もあるが、名前通りフェイントな天体が観測できそうではない。

以上のような話合いのあと、今年度の観測装置ワークショップの進め方を議論し、概ね次のように決めた。

1) 日程：平成 4 年 3 月 24-26 日 (場所は国立天文台)

2) 世話人：岡村、海部、舞原

3) 内容：*アダプティブオプティクス、分光 (高分散、多天体、赤外線)、CCD 開発などの重要なテーマを幾つか取り上げて、開発の進め方をディスカッションする。

*2 日目午後、若手によるパネルディスカッションのセッションを設ける。

*3 日目午後、SUBARU 本体とドームや建物の設計上の基本的な諸問題について意見交換を行なう。

※ 当日出席できなかった委員からのコメントの追加。

*アダプティブオプティクスについては、アメリカで技術公開され、購入できるものが出始めている。自主的に会得すべき開発要素はあるが、レーザー星の開発を含め、基本的には見通しがついてきた。(まだ良く見えて来ないという訳ではない。)

*金で飼うのはやもうえないというより、むしろ積極的に「大事な要素だから予算を組む必要がある」と考えるべき。

(文責 舞原)

XI. 天文情報処理研究会 (IRAF 担当者会)

第 6 回会合報告

市川伸一 (国立天文台：世話人)

IRAF 担当者会の第 6 回会合が以下のように開催されました。

日時 平成 3 年 6 月 10 日 -11 日

場所 兵庫県立西はりま天文台

参加 34 名

まず、今回の会合において IRAF 担当者会の名称が変更になりました。結成以来一年以上が過ぎ会の初期活動が一段落し、今後活動が次のステップへ進んでいくという状況であるということと、会の活動内容が一般にもわかりやすいようにするという事で、

天文情報処理研究会

という名称になりました。当分は旧名と併記します。また、会の初期活動の締めくくりとして、初心者マニュアル、各観測機器用クックブック、開発マニュアル、管理者マニュアルなどの手引書をまとめて「IRAF クックブック」を出版することにしました (すでに発行されました)。更に会の今後の活動として、IRAF にとどまらずもっと広い視野で 2 月のソフト開発シンポにむけて各人の課題を固めていくこと、などが議論されました。それらの新たな活動とともに初心者サイトへのサポートなども強力に続けていくことが確認されました。会合についての詳しくは集録 (発行済) をごらん下さい。

なお、天文情報処理研究会の今後の会合予定と主要テーマは、

第 7 回	9 月 2、3 日 (確定)	野辺山宇宙電波観測所 電波天文関係の情報処理、天文ネットワーク
第 8 回	12 月 3 - 5 日 (予定)	国立天文台 (三鷹) ソフトウェアの開発、天文データベース
第 9 回	3 月 (予定)	木曾観測所 JNL T のデータ解析

となっています。メンバーでない方も是非参加下さい。

天文情報処理研究会では、会合のほかに、電子メールによる情報ネットワーク「JIRAFNET」、会報発行も従来どうり行なっています。

天文情報処理研究会 (IRAF 担当者会) に関するお問い合わせは、国立天文台 (三鷹)・天文学データ解析計算センター・市川伸一までお願いします。また、会合集録や「IRAF クックブック」の請求も市川までお願いします。

XII. 天文情報処理研究会 (IRAF 担当者会)

第7回会合報告

市川伸一 (国立天文台: 世話人)

天文情報処理研究会 (IRAF 担当者会) の第7回会合が以下のように開催されました。

日時 平成3年9月2日-3日

場所 国立天文台野辺山宇宙電波観測所

参加 40名強 (世話人: 森田、佐々木敏)

今回は会の名称を変えてからの初めての会合で、これまでのIRAF中心だった会の活動をもっと幅の広いものにしていくためのきっかけとして野辺山で開催されました。AIPSやNEWSTARなどのデータリダクションシステムの見学や人的交流を通じてこの会の活動がより広い視野を持ったものになっていく手応えを感じた会合でした。主な内容は

- | | |
|--------------------|------|
| ・サイト報告 | 13機関 |
| ・宿題報告 | |
| FITS | 吉田重 |
| SUN版SPIRAL | 濱部 |
| ・野辺山でのデータリダクション | 森田 |
| ・所内見学 | |
| ・天文ネットワーク | |
| エリダヌス | 近田 |
| NAO-WAN | 小笠原 |
| ・開発事例 | |
| 電波ヘリオグラフ | 花岡 |
| KISOIMAGE | 市川隆 |
| IRAF image browser | 佐々木敏 |
| ・討論 | |

です。参加者の中には野辺山観測所をきちんと見るのは初めてという方も多かったようです。討論では、今後の会合や、12月のソフト開発シンポ、11月のツーソンでのソフトウェアコンファレンスに向けての議論や、FARM-SHIPや国立天文台すばる推進室との協力についての議論が行なわれました。この会合についての詳細はすでに発行されている集録をごらん下さい。

なお、天文情報処理研究会の今後の会合予定と主要テーマは、

- | | | |
|------|---------|---------------------------|
| 第8回 | 12月2-3日 | 東京学芸大、国立天文台 (世話人: 泉浦、市川伸) |
| | | 『データベース・データアーカイブ』 |
| 第9回 | 3月 | 木曾観測所 (世話人: 市川隆、濱部) |
| | | 『すばるのデータ解析』 |
| 第10回 | 6月 | 京大宇宙物理 (世話人: 太田) |
| | | 『 (未定) 』 |

となっています。現在メンバーでない方もお気軽に参加して下さい。第8回以降は毎回重点テーマを決めて議論を進めていくことになりました。メンバー以外の方の御協力をお願いすることも多くなるかと思われしますのでよろしくお願いいたします。なお、第8回会合に引き続いて(12月3、4日)、「データ解析/データベース ソフトウェア開発シンポジウム」が開催されます(国立天文台にて)。高エネルギー物理学やリモートセンシングなど他分野の専門家の講演や、天文でこれまでに開発された様々なソフトの紹介(実演含む)など盛りだくさんの内容です。こちらにも合わせて御参加下さい。詳しくはシンポジウム世話人(市川伸 他)までお問い合わせ下さい。

天文情報処理研究会では、会合のほかに、電子メールによる情報ネットワーク「JIRAFNET」、会報発行も従来どおり行なっています。

天文情報処理研究会 (IRAF 担当者会) に関するお問い合わせは、国立天文台 (三鷹) ・天文学データ解析計算センター・市川伸一までお願いします。

XIII. 観測装置小ワークショップ

「高解像観測・小望遠鏡による観測」報告

小倉勝男 (国学院大学)

3回目の観測装置小ワークショップは、残った、性質の異なる上記2つのテーマをあわせて取り上げて、10月2日に三鷹の講義室で行なわれた。「高解像観測」では干渉・スペックル・アダプティブ光学などの方法でなされる天文学の狙いと観測装置開発上の目標と問題点を明らかにすることがめざされ、3つのレビュー(西川・片坐・高見の各氏)と5つのコメントが発表された。目的が十分に達せられたとは言えないかもしれないが、それぞれの輪郭がずいぶんと明確になってきたし、いくつかの基礎的な実験も始まっていて心強く思われた。

第2のセッションでは、小望遠鏡(海外を含む)を使う、目的を絞った観測プロジェクトの紹介や問題提起を通じて「すばる」を支える小望遠鏡の有効利用の方途をさぐることを目標として、5つの発表と2つのコメントがなされた。全体として時間が不足気味だったが、「ふるさと創生1億円」などにより各地に作られつつある(主として)自治体天文台のもつ数10センチクラスの望遠鏡の実情の報告(小川村天文台の坂井義人氏)はとくに興味をひいた。

XIV. プログラム小委員会答申

光赤外太陽専門委員会
委員長 小平 桂一 殿

平成3年10月26日

プログラム小委員会
小委員長 若松 謙一

エンジニアリングタイムの導入について (答申)

かねて、委員長より検討の要請がありました岡山天体物理観測所188cm望遠鏡へのエンジニアリングタイム導入について、10月21日家・装置開発小委員長、山下所長らを含む拡大プログラム小委員会を開き検討致しましたところ、下記の結論に達しました。この件についての専門委員会としての基本方針をお示し下さいますようお願い申し上げます。なお、次のプログラム小委員会は11月11日頃開催予定であります。

また、多くの観測夜数を必要とする研究テーマの導入については、本小委員会で検討を近いうちに開始する予定であります。光学天文連絡会側でもより一層の議論をしていただきたい旨同連絡会へ要請されんことをお願い申し上げます。

参考までに、本小委員会の議事抄録を同封致します。

記

望遠鏡や観測機器の整備、開発、性能評価などのため、岡山天体物理観測所188cm望遠鏡について、エンジニアリングタイムを当面観測割付夜数の10%を限度として来期(平成4年1月以降)より試行し、専門委員会で承認され次第正式導入する。

このエンジニアリングタイムの割付は、所長からの各期の運用目的・方法の提示に基づいて本小委員会で決定する。なお、その運用については、同観測所長の責任で行い、プログラム小委員会に於てその利用状況を適宜報告するものとする。エンジニアリングタイムの有効利用のため利用者側も積極的協力を行うことを要請する。

以上

天文情報処理研究会第8回会合のお知らせ

天文情報処理研究会(IRA F担当者会)第8回会合を以下のように開催いたします。メンバー以外の方もお気軽に御参加下さい。

日時 12月2日(月)午後1時-12月3日(火)午後5時
場所 12月2日:東京学芸大学(小金井)
3日:国立天文台(三鷹)講義室
テーマ 「データベース、データアーカイブ」
世話人 泉浦(東京学芸大)、市川伸(国立天文台)

平成3年度国立天文台ワークショップ

『データ解析/データベース ソフトウェア開発シンポジウム』 のお知らせ

データ解析、データベース関連の技術向上、開発促進のために表記研究会を開催いたします。今回はその第一回としてこれまでの開発状況を把握するとともに今後の開発の方向を探ることを主目的としたと思います。奮っての参加をお願いいたします。

日時 12月3日(火)午後1時-12月4日(水)午後5時
場所 国立天文台(三鷹)講義室
内容 ・招待講演(天文以外の分野におけるデータ解析)
・デモンストレーション(応用できそうな市販のソフトも含む)
・よく使われている(できあい)ソフトウェアの紹介
・これまでの開発の成果
＜データ解析＞＜データベース＞＜ツール＞＜研究支援＞
・各開発グループの現状報告と開発計画
世話人 市川(伸)、浜部、佐々木、市川(隆) ほか

平成3年度国立天文台ワークショップ

『HSTによる天文学』のお知らせ

日時 12月5日(木) 10:00-16:00
場所 国立天文台講義室

本ワークショップでは、HSTデータセンターの実質的な第一歩を踏み出すために、(1)HSTの稼働状況・成果の把握、(2)HSTの公開データの解析に関する情報交換、(3)ISO衛星のプロポーザル準備のためのIRAS画像データの活用法、(4)その他関連する事項についての討議を行いたいと思っています。関心をお持ちの方々の多数の御参加を歓迎します。

世話人 西村史朗、池内了、岡村定矩

「すばる」観測装置ワークショップ 1st circular

「すばる」望遠鏡の観測装置の開発に向けては、1985年の観測装置ワークショップ以来検討が続けられています。とりわけ昨年12月に行なわれた観測装置の公募ワークショップでは多数の提案があり、装置開発に向けての意欲の高まりとマンパワーの増加が少しずつながら見えはじめてきました。本年度は提案された装置を、「分光器」(5月)、「分光撮像・広視野撮像」(7月)、「高解像観測 他」(10月)、「高分散分光器」(11月)の分野に分けて小ワークショップで検討を続けてきました。提案された装置には、(a)基本戦略は定まってプロトタイプの開発が進んでいるもの、(b)基本戦略はあるがまだ基礎開発の段階にあるもの、(c)基本戦略を作るための基礎実験を必要とするもの、の三種があるように見えます。このワークショップではそれぞれについて、これまでの到達点を見極め、今後どのようにして開発を進めるかの方策を議論したいと思えます。また観測装置に関連してソフトウェアの問題もクローズアップされてきました。望遠鏡・観測装置と観測者とのインターフェイスとしての「観測・制御ソフト」と、膨大なデータと研究者のインターフェイスとしての「データ解析ソフト」の構築は、観測装置開発と一体のものと言えます。今回はソフトウェア開発の問題を初めてとり上げ、検討項目を洗い出したいと思えます。また若い世代をバネラーにして、「装置開発の活力を作るために」というテーマでパネルディスカッションを行ないます。さらに、今回はこれが光天連シンポにかわるものでもありますので各方面から要望の強い「すばる」望遠鏡本体の設計についてのレビュー・討論の機会を設けることになりました。

ワークショップは世話人から依頼した講演を軸に進めますが、一般講演も募集します。ワークショップの進め方について御意見がありましたら世話人までお知らせ下さい。プログラム概要、申込書は次のサーキュラーと共にお送り致します。

世話人(連絡先)

海部宣男 国立天文台 0422-41-3610
舞原俊憲 京都大学理学部物理学第二教室 075-753-3858
岡村定矩 東京大学理学部天文学教室 03-5800-6880

記

日時 平成4年3月24日(火) 10:30 - 26日(木) 17:00

場所 国立天文台講義室

午前		午後	
3月24日	「すばる」の設計検討会	「すばる」の設計検討会	観測装置
25日	観測装置	観測装置	パネルディスカッション
26日	ソフト開発(観測・制御)	ソフト開発(データ解析)	まとめと展望

国立天文台周辺の宿泊施設 (H.= ホテル)

シティテル武蔵境	武蔵野市境南 2-4-15	Tel. 0422-33-5111	武蔵境駅南口
三鷹シティ H.	三鷹市下連雀 3-21-5	Tel. 0422-48-4111	三鷹駅南口
ビジネス H. 三鷹プラザ	三鷹市下連雀 3-22-2	Tel. 0422-43-7386	三鷹駅南口
サンパーク H. 三鷹	三鷹市下連雀 3-37-31	Tel. 0422-42-0003	三鷹駅南口
西武プラザビジネス H.	武蔵野市中町 1-14-11	Tel. 0422-55-1711	三鷹駅北口

「赤外線検出器ワークショップ(第3回)」のお知らせ

赤外線検出器ワークショップ(第3回)

日時: 1992年1月29日(水) 13:00

1月30日(木) 17:00

場所: 国立天文台三鷹・講義室

上記の日程で赤外線検出器ワークショップを行ないます。今回のワークショップは、すばる望遠鏡建設に向け、その主要な観測装置の心臓部となる赤外線検出器の開発をどのように進めて行くかということを中心に、充分なディスカッションを行なうことのできるワークショップを目標としています。特に現在国内、国外においてもっとも開発の遅れている、中間赤外線検出器の開発を話題の中心とし、このワークショップが開発体制の足掛かりとなるよう期待しております。現在プログラムは確定していませんが、初日は主として各波長域における検出器の開発に携わっている天文関係者・メーカーの方を中心に現状を紹介していただき、後半は国内における開発の可能性と体制作りということを中心に議論を進めていきたいと考えております。発表者は現在世話人を中心として交渉中ですが、このワークショップに報告を希望される方は是非世話人まで御連絡ください。

1991年11月 世話人 村上浩(宇宙研)、上野宗孝(国立天文台)

連絡先

〒181 東京都三鷹市大沢2丁目21-1

国立天文台・光学赤外線天文学研究系

上野宗孝

TEL 0422-41-3610 FAX 0422-41-3608

前ページより続く

国立天文台周辺の宿泊施設 (H.= ホテル) (続き)

H. プレステージ	武蔵野市中町 1-17-3	Tel. 0422-53-2525	三鷹駅北口
吉祥寺東急イン	武蔵野市吉祥寺南町 1-6-3	Tel. 0422-47-0109	吉祥寺駅南口
吉祥寺 H.	武蔵野市吉祥寺本町 1-21-4	Tel. 0422-21-8236	吉祥寺駅北口
吉祥寺第一 H.	武蔵野市吉祥寺本町 2-4-14	Tel. 0422-21-4411	吉祥寺駅北口
調布クレストン H.	調布市小島町 1-39	Tel. 0424-89-5000	調布駅北口
調布 H.	調布市布田 2-1-3	Tel. 0424-82-3276	調布駅北口
サバーブイン調布	調布市布田 4-2-7	Tel. 0424-83-2791	調布駅南口
調布アーバン H.	調布市飛田給 1-1-25	Tel. 0424-86-9321	飛田給駅北口

「すばる通信」の発行について

8メートル望遠鏡の建設がいよいよ進み始め、名称もプロジェクト名JNL Tに替えて「すばる」となりました。多数の人の協力で名実共に世界に誇るすばる望遠鏡を作り上げていくため、準備体制から建設の体制に「すばるプロジェクト室」も衣替えをしたところです。これまでのスタッフ全員はもちろん、どんどん新しい力を加えてこの大事業にあたりたいとみな張り切っています。よろしくおねがいします。

この機会に、すばる計画に関心をもつ方へに情報をすみやかにお届けするため、コンピュータ・ネットを併用した「すばる通信」をスタートしました。既に「創刊号」から第3号まで発行しました。内容は会議の報告を中心として、開発実験状況や技術的な検討の報告を含みますが、適宜ニュースや意見を乗せていきます。また関連研究者の意見や情報も乗せて、すばる建設の情報板としての役割を果たせればと思います。

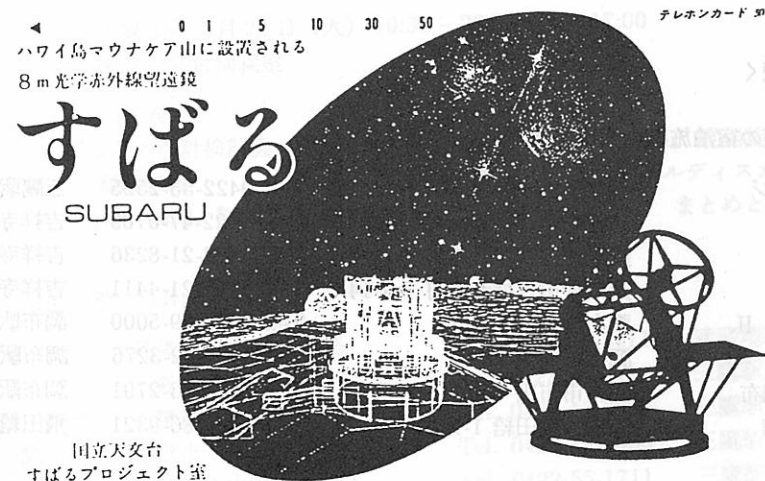
光天連の皆様方からの、感想、要望などお待ちしております。

「すばる通信」購読ご希望の方は、お名前と、E-Mailの場合はE-Mail IDを、郵送の場合は郵送先を下記までお寄せください。

E-Mail: ohayash@c1.mtk.nao.ac.jp

〒181 三鷹市大沢2-21-1 国立天文台 林 左絵子

PS)「すばる」望遠鏡パンフレットの日本語版は既に皆様のお手元に届いていると思いますが、実は英語版もあります。ご希望がありましたらお送りいたします。ご注文も上記まで。なお、日本語版も届いていないようでしたら、お知らせください。ただし残部僅少につき、在庫が尽き次第あきらめていただくことになります。



XV. 会員異動

【新入会】

- 山下由香利 宇宙科学研究所
〒229 神奈川県相模原市由野台 3-1-1 Tel 0427-51-3911 ext. 2603
- 神戸 栄治 防衛大学校 地球科学科
〒239 神奈川県横須賀市走水 1-10-20 Tel 0468-41-3810
- 高田 唯史 京都大学理学部宇宙物理学教室
〒606 京都市左京区北白川追分町 Tel 075-753-3907
- 馬場 歩 京都大学理学部宇宙物理学教室
〒606 京都市左京区北白川追分町 Tel 075-753-3907

【異動】

- 氏家慧一 石巻専修大学経営学部 ← 東北大学理学部天文学教室
〒986 宮城県石巻市南境新水戸 1
Tel 0225-22-7711
- 坂井義人 村営小川村天文台 ← 斐太彦天文処 (飛騨プラネタリウム)
〒381-33 長野県上水内郡小川村大洞
Tel 0262-69-3960
- 仲野 誠 大分大学教育学部 ← Mount Stromlo and
〒870-11 大分市旦野原 700 Siding Spring Observatories
Tel 0975-69-3311 ext. 360 Australia

【所属変更】

- 吉川 真 郵政省通信総合研究所鹿島宇宙通信センター 宇宙制御技術研究室
〒314 茨城県鹿島郡鹿島町平井 893-1
Tel 0299-84-4126 (研究室直通) 0299-82-1211 ext. 222
- 土屋 裕 浜松ホトニクス(株)中央研究所 ← 浜松ホトニクス(株)技術部第4グループ
〒434 静岡県浜松市平口 5000 〒435 静岡県浜松市市野町 1126-1
Tel 053-586-7111

【連絡先等変更】

山本将史

【海外出張】

- 渡部潤一 Institute for Astronomy
2680 Woodlawn Drive, Honolulu, HI 96822, U.S.A.
Tel. 808-956-8701

住所、所属等に異動のあった方は速やかに事務局までお知らせ下さい。

光学天文連絡会会報 第62号 平成3年11月15日発行

編集/発行 田辺俊彦

発行元：光学天文連絡会事務局

東京大学理学部天文学教育研究センター

〒181 東京都三鷹市大沢 2-21-1

Tel 0422-41-3635 Fax 0422-41-3749

e-mail ltanabe@c1.mtk.nao.ac.jp

印刷：株式会社 東盛社